



親バカ礼賛

西崎病院整形外科
吉川 朝昭

私は親バカである。しかも筋金入りだ。自嘲しているのではなく、自慢しているのだと思っただけだ。

春先から娘がフィギュアスケートを習いだした。きっかけは、お友達のフィギュアスケートの発表会に誘われたことである。予想以上にそのお友達が上手で、衣装もステキだったと興奮して帰宅した細君と娘は、その晩二人してインターネットショッピングサイトで、このコスチュームがいい、これはイマイチなどとすっかり「わたしも習っちゃう」モードで盛り上がっていた。もう小学校5年生でもあり、いまさら荒川静香や浅田真央になれるはずもなく、「フィギュアスケートって将来どうなのよ」と眉をひそめたものの、やはり娘はかわいいので習わせてあげることにした。

数回に1回は、スケート場までの迎えを頼まれる。その日、いつも通り8時過ぎにスケート場に迎えに行くと、練習は終わったのだが仲間ともう少し滑っていたいとお願ひされ、仕方なく暫く待つことにした。最初はスケート場の外で待っていたのだが、ガラス越しに娘の滑っているのがちらちらと見える。なかなか上手に滑っている。どれどれとスケート場に入ると、さすがに寒い。こちらは半袖に素足だ。しかし、届いたばかりの水色のコスチュームで楽しげに滑る姿に寒さを忘れた。「お父さん、これが出来るようになったよ。」時々私の近くに寄って来て、習いたてのテクニックを見せてくれる。「娘が一番上手なのでは？」とは、いくら親バカな私でも言えないくらいに他の生徒との間の技術の差は歴然なのだが、「上達速度が一番だろう。」とバカなことを考えている。すると私

と同年配のお父さんが、自分の娘にいろいろとアドバイスしている光景が目に入ってきた。「自分はぜんぜん滑れないくせに〜。」とその娘が笑う。「見るのは上手なの！」お父さんが言う。私と五十歩百歩だ。でもほほえましい五十歩と百歩である。

だから私は運動会が好きだ。自分の子供の競技や演技を見ることはもちろんのこと、そこに集う親バカの展示会に参加するのが楽しいのである。一挙手一投足を逃すまいとビデオを構えるお父さん。声を囁らして応援するお母さん。家族総出のお弁当時間。そんな人達に囲まれて幸せな気分になる。だが時々腹が立つこともある。自分の子供のビデオを撮らんがために、撮影中の私の前にしゃしゃりでて、撮影をする人がいたり。我が子かわいさのあまり、他人の子供をけなす親がいたり。これは親バカではなく、バカ親だ。親バカとバカ親、言葉は似ているが、全くの別物で、むしろ対極にあると言ってもいい。親バカを見るのは楽しいが、バカ親を見るのは不愉快だ。しかし、悲しいことにバカ親はいたる所にあまねく存在する。エスカレーター付近でふざけて遊ぶ子供たちがいると、私はすかさず注意する。まあたいていの場合には近くに親がいて、ばつが悪そうに「すみません。」(子供の手を引いて)「ほらだから言ったでしょう！」と言う。子供が悪いのであって親である自分は悪いと思っていない。最初の「すみません。」は子供の代わりに謝っているだけだ。ひどいときは、突然我が子を怒鳴りつける変なおじさん(不本意ながら私のこと)を睨み付けることさえある。このバカ親が！と私は思う。

昨今、バカ親に類する人々が増えて、世の中がおかしくなってきた。子供を狙ったいたましい凶悪犯罪があとをたたない。あるいは民族や宗教が違うというだけでいとも簡単に命を奪ってしまう。皆がみな(庶民や指導者あるいは為政者)、自分の親バカぶりを楽しみ、他人の親バカぶりを尊重することが出来るような人々であれば、凶悪犯罪・無差別テロなんて起きようがない。愚にもつかない戦争を繰り返す

こともないだろう。人は誰しも、愛し愛される家族がいるのだから。家族の絆・愛情を超えてまで、執着すべき欲望があるだろうか？ 守るべき戒律やイデオロギー、宗教や民族・国家があるのだろうか？ 私は天下国家を論ずる器ではない。日々の家族の愛情のやりとりや些細な感情で、すぐにいっぱいになってしまう小さな器である。世の中の多くの人がある小さな器を大切なもので満たそうと、毎日毎日を懸命に生きている。その小さな器を守れずして、あるいは犠牲にして、何が天下国家なのだろう？

マッチ擦る つかのま海に 霧ふかし
身捨つるほどの 祖国はありや

寺山修司

身捨つるほどの祖国なんてないから、忠誠心・愛国心なんていない。自由に暮らそうという安直な歌ではない。もしそういう祖国があるのなら、どういう国家なのだろうか？ マッチを擦るつかの間の光芒では漠として見えてこな

い身捨つるほどの祖国よ。そんな祖国がこれまでであったのか、そしてこれから存在するものなのか。これは詩人の渾身の問いかけだ。しかし詩人でもない単なる親バカな私はこう歌う。

マッチ擦る つかのま茶の間に 寄り添って
嵐の夜も 灯下の笑顔

吉川朝昭

時計を見ると9時を過ぎていた。「お父さん、もう十分滑ったから帰ろう。」やっと娘がスケートリンクから上がってきた。「もう、長いんだから。」少し口をとがらすが、かわいい娘の滑る姿を見て気分は上々だ。駐車場までの道すがら、娘が私の肘のあたりに手を置いて言った。「お父さん、寒くなかった？ 長いこと待っていてくれて、ありがとね。」冷たい手のひらだったが、伝わってくるものは暖かかった。じわっとこみ上げて来るものを、鼻をすすってごまかした。これだから親バカはやめられない。



随筆



光る砂漠

豊見城中央病院
桑江 紀子

当直あけの日、南部病院から降りくる道。目に入る海は、散乱する初夏の日差しを幾重もの波の絨毯のうえに反射していた。銀色の海。ハンドルを握る腕に日差しがわずかに痛い。＜光る砂漠＞という言葉が脳裏に浮かんだ。信号のシグナルが青に変わる。砂漠は光るだろうか、ハンドルをきりながら、考える。

不意に、遠い記憶が、訪れる。＜光る砂漠、影を抱いて少年は魚をつる。震える指先。少年は早く魚を釣りたい。＞矢澤の詩だ。確かあれは高校生の兄の本で、銀色の波状を描く砂漠の写真が表紙になっていた。課題図書のものに丸いマークが貼られていた。正方形の薄い＜童話社＞のその装いに魅せられて内緒で読んだ。本には詩が、1枚、1枚、自然の風景の写真とともにのっていた。繊細な言葉が短い韻律で並

んでいた。一本の細い道の写真の見開きのページにかかれていた＜絶筆、道がみえる、小道もみえる、ただし、わたしがいない、どこへ行ったのだ、わたしの愛は。＞と記された詩は子供のわたしの胸をもうつものであった。矢澤幸、は若くして病と戦いながら、透き通るような詩を書いてきた。夭折、死後詩集が出版されたというような解説が書かれていたと記憶する。(本はどこへ行ったのだろうか)

切々たる言葉もあった、＜5月：5月が去るとして何を悲しむ、たとえ伏すみといえども生きると決めたは、この5月のときではなかったか＞。その中には明るい色調を帯びたものもあって、その幻想的な表現の＜光る砂漠、影を抱いて少年は魚をつる。震える指先。少年は早く魚を釣りたい＞は当時のわたしの好きな詩句だった。

＜むかしの記憶＞、サングラスをかけなおそうとして、ふと、砂漠は光らない、光るのは海だ、と思う。矢澤の詠んだ＜光る砂漠＞とは、実は、海のことだったに違いない。

2007年、夏、わたしはここで働いている、生前、母が＜いくさで死んだ姉と妹を思い出す＞と、2度と足を運ばなかった土地、光る砂漠のきらめくところ、で。



随筆



「安里川の岸边」 ～ 崇元寺橋の下のカメ～

財団法人沖縄県総合保健協会附属診療所
大城 盛夫

毎朝、私は崇元寺橋を渡って左折し安里川沿いに歩いて国際通りのバス停留所に向かう。安里川に平行して反対側右上空にはモノレールの軌道が伸びている。川沿いの歩道は幅が広く、ホウオウボクの並木が等間隔に植えてあり、日陰を作って川からくる涼風は肌に心地好い。私の大好きな散歩道である。

安里川の下流は久茂地川に分岐し、本流は泊港に続き東支那海に注ぐので、満潮のときは海水が逆に浸入して淡水と混ざることになる。満潮時にはボラの群れが溯上して安里川はにぎわう。分岐点の三角地帯に公園があり、その公園の川沿いにアヒルが2～3羽住みついて、そのアヒルがときたま崇元寺橋下まで遠征して岸にあがって遊んでいる。

私が最も興味深く安里川の水面をみているのは、孤独な水亀である。十数年まえから見掛けていたが年に数回しか見ることがない。大きさは手のひら程度で人間の姿にきづくと水中に姿をくらます。どうやら恥ずかしがり屋のようだ。大潮の満潮のとき水面は高くなり透明度の良い時には、亀の姿がよく観察できる。潮流に流されないで同じ場所で立ち泳ぎをして、自分の口に入りそうな物は吸いこんでいるが合わない物は吐きだす。そのとき白いガム風船のようなものが出るが再び口のなかに収める。プロ野球の外人投手がガムをかみながら時々小さな風船を口外にだしてまた吸い込むしぐさに似ている。

ある日の夕方、崇元寺跡近くの自宅に向かって岸辺を歩いていると、ジョギング姿の高齢の男性が立ち止まって川の水面を見ながら笑っていた。私が近づくと無言で水面の亀を指差して黙って笑っている。

その時はやはり満潮時の大潮であり、親子の

亀が水面を泳いでいた。小亀の大きさはアヒルの卵大の大きさで可愛い。私も笑った。しばらく見ていると、小亀は元気よく流れにのって1メートルほど離れると向きを反対にかえて親亀に近づき、また逆の方向に活発に泳ぐ。この間、さすがに親亀は姿を隠すことはなかった。

今年の夏の台風の時、安里川が氾濫して国際通りの商店街に浸水騒ぎがあった。そのときの安里川の濁流は凄かった。そのとき亀の親子はどこに隠れていたのだろうか。

亀の生態を百科事典で調べてみると、おもしろいことが分かった。亀は何も食べずに1か月間も生きて、長期間の乾燥に絶えること。そして亀は長命である。アメリカ・ハコガメは野生で138年も生きた。亀は最も歩みののろい動物とされているが、アオウミガメは10日間で500キロも泳いだことが知られている。方向感覚が良く、とくにウミガメは遠い距離を旅することができる、と記されている。

安里川のこの水亀から教えられることがある。水亀は崇元寺橋より下流には流されて行かない。行動範囲を超えて港に出て大海に出ることはしない、つまり境界線を越える冒険をしないのである。川の上空を白鷺が翼を広げて優雅に飛んで行く姿を見上げて、私はうっとりする事がある。しかし、見栄はよくなくても、水亀が他の動物と競うことをせず、ゆうゆうと自然に逆らわずに泳ぐ姿に感動した。

今年私は75歳になった。沖縄の結核医療対策にたずさわって44年。琉球政府時代から本土復帰前の琉球政府厚生局金武保養院（病床数460）は医師不足、予算不足、医療設備も不十分であった。そこに厚生省派遣の結核専門医達が6か月交代で赴任し応援勤務して下さった。或る先生が最後の日に書き記して下さったのが次の句である。

「天の時、地の利、人の和」

私はこの句を座右の銘にして永続勤務した。水亀のように、どんな濁流がきても、あわてず騒がず、落ち着いてマイペースで生きて行きたい。(以上)

お知らせ

第105回沖縄県医師会医学会総会日程

会 期：平成19年12月8日（土）・9日（日）
 会 場：パシフィックホテル沖縄及び
 沖縄県立浦添看護学校

(3) ソーシャルワーカーより
 沖縄県医療ソーシャルワーカー協会
 事務局長 又 吉 智 子
 (4) 沖縄県政策参与より
 沖縄県政策参与 玉 城 信 光
 (5) 沖縄県医師会より
 沖縄県医師会会長 宮 城 信 雄

(第1日) 平成19年12月8日（土）

於：パシフィックホテル沖縄

1. 第63回沖縄県医師会定例総会
14：00～14：30
2. 第105回沖縄県医師会医学会総会開会宣言
14：35～14：37
3. ” 会頭挨拶
14：38～14：41
4. 特別講演 14：45～15：45
座 長：沖縄県医師会医学会会長
比 嘉 實
演 題：「医療事故調査制度の
設立にむけて」
講 師：虎の門病院泌尿器科部長
小 松 秀 樹
5. 第22回沖縄県医師会医事功労者表彰式
15：50～16：15
6. シンポジウム 16：20～18：50
テーマ：「療養病床の削減について」
座長：沖縄県医師会副会長
小 渡 敬
沖縄県医師会理事
玉 井 修

シンポジスト：

- (1) 行政より
 沖縄県福祉保健部医務・
 国保課医療制度改革専門監
 平 順 寧
- (2) 沖縄県療養病床協会より
 沖縄県療養病床協会会長
 松 岡 政 紀

※講演順は未定

7. 懇親会 19：00～

(第2日) 平成19年12月9日（日）

於：沖縄県立浦添看護学校

1. ポスター掲示準備 08：30～09：00
2. ポスター閲覧 09：00～09：30
3. 発表・討論 09：30～12：11

※12：30までにポスターを撤去する

ミニレクチャー	10：50～11：50
分科会長会議	12：20～13：00
～ 昼 食 ～	12：15～13：00

4. ポスター掲示準備 13：00～13：30
5. ポスター閲覧 13：30～14：00
6. 発表・討論 14：00～15：59

※16：30までにポスターを撤去する

※沖縄県医師会ホームページ『沖縄県医師会医学会総会』コーナーにも掲載しております。
 (http://www.okinawa.med.or.jp/doctors/igakkai/igakkai105/igakkai105.html)

お知らせ

一般医家に役立つ呼吸器・心臓大血管の リハビリテーション研修会

開催概要

昨年に引き続き、平成19年度も一般医家を対象とした標記研修会を開催いたします。本医学会会員に限らず、非会員の方も参加できます。臨床的、実戦的な内容の研修会には是非ご参加下さいますようお願いいたします。

日時： 2008年3月1日（土）10時30分～16時30分

2008年3月2日（日）10時00分～16時00分

場所： 東海大学代々木校舎講堂（〒151-8677 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4）

後援： 日本医師会、日本呼吸器学会

共催： 日本呼吸ケア・リハビリテーション学会

定員： 100名

受講料： 20,000円（当日の昼食代を含みます。）

単位： 日本リハビリテーション医学会専門医・認定臨床医生涯教育研修 20単位

日本医師会生涯教育制度3単位

担当委員： 豊倉 穰（東海大学）

3月1日（土）

10:30～11:30	呼吸器・心臓大血管疾患リハビリテーションと診療報酬	田中宏太佳	中部労災病院リハビリテーション科部長
11:30～12:30	冠動脈疾患とその治療	伊苺 裕二	東海大学医学部内科学系循環器内科教授
13:30～14:30	メタボリックシンドロームの運動療法—インスリン抵抗性を中心として	間嶋 満	埼玉医科大学リハビリテーション科教授
14:30～15:30	心臓手術とリハビリテーション	磯村 正	葉山ハートセンター心臓外科センター長
15:30～16:30	心不全のリハビリテーション	伴 和信	伴医院院長

3月2日（日）

10:00～11:00	神経筋疾患の呼吸障害とリハビリテーション	花山耕三	東海大学医学部専門診療学系リハビリテーション科学準教授
11:00～12:00	胸部外科手術前後の呼吸管理とリハビリテーション	上月正博	東北大学大学院医学系研究科機能医科学講座内部障害学分野教授
13:00～14:00	呼吸器リハビリテーション効果に関するエビデンス	千住秀明	長崎大学医学部保健学科臨床理学療法学講座教授
14:00～15:00	COPDの呼吸管理：急性期から在宅ケア	野村浩一郎	静岡医療センター内科診療部長
15:00～16:00	試験		

修了証：最終日に研修科目の内容についての試験があり、合格者には修了証を交付します。

全ての科目を受講した方のみを受験資格があります。

申込：日本リハビリテーション医学会ホームページ（<http://plaza.umin.ac.jp/jarm/kenshuukai/kenshuukai.htm>）の「日本リハビリテーション医学会研修会の開催案内」にアクセスしてお申し込み下さい。

[申込に関する問い合わせ先]

（株）サンプラネット メディカルコンベンション事業本部 大野謙一

FAX 03-3942-6396 E-mail address: k-ohno-sun@hhc.eisai.co.jp